

「子どもの本を読む会」の果たした役割

前田 千慧 (元中央図書館)

大西 登貴子 (中央図書館)

前野 貞子 (中之島図書館)

脇谷 邦子 (中央図書館)

はじめに

大阪府立図書館に「子どもの本を読む会」(以下、「読む会」という職員有志による研究会があった。1968(昭和43)年2月に発足し、2004(平成16)年3月に解散するまで、じつに36年間にわたって活動を続けてきた会である。

「読む会」の活動については、中之島図書館の百周年記念に刊行された『中之島百年』において、1974(昭和49)年に夕陽丘図書館で児童室が設置され、その活動が中央図書館のこども資料室へとつながっていった経過とともに簡潔にまとめられている(注1)。また発足当初からの「読む会」の活動については、『大阪府立図書館紀要』第8号にまとめられている(注2)。あわせてお読みいただきたい。

この36年の間に「読む会」にかかわった府立図書館職員は多数にのぼり、そうした人たちの努力の積み重ねによって今日の府立図書館の児童サービスが作り上げられたといっても過言ではないであろう。

この小稿は、夕陽丘図書館における児童室開室の頃を中心に、その前後における「読む会」の活動の歴史をたどり、活動の記録として書き留めておくことを目的とし、「読む会」が府立図書館の中で果たした役割についても考察する。

1 夕陽丘図書館での児童室開室前後を中心に

1.1 児童書合評会を通して

「読む会」では、資料をみる目を養うことを目的に子どもの本の合評会を“とぎれそうだとぎれることなく続け”てきた(注3)。合評会の成果は、府立図書館巡回文庫課の広報紙『わだち』の中での児童書の紹介や、児童書のリスト作成等の業務に活かされていた。

『わだち』には1968(昭和43)年から“子ども達に楽しい読書を!”(注4)“子供たちにこんな本を!”、“私の選んだ本”、“新刊ガイド本を読むたのしみ”などの欄で本の紹介をしたり、“栄養士の子供の読書についての講義”(注5)、“子どもと子どもの本

と自動車文庫と”（注6）、“子どもと一緒に楽しもう 子どもの読書とお母さん ”（注7）などの子どもの本と読書に関する記事も随時掲載された。

児童書紹介リスト『児童読み物案内』は、夏休みに向けて、1969～1971(昭和44～46)年のいずれも7月に4ページだてで発行され、『わだち』と一緒に配布された。その後巡回文庫課での配布を目的に冊子の形をとることになり、1972(昭和47)年10月には『としよかんで借りて読むどうぶつの本』が作成された。このリストは、“はじめに”に記されているように館の職員研修事業に組み込まれることになった。さらに翌年からは会員も参加する形の児童書リスト編集委員会が組織され、1973(昭和48)年10月には『こどものための100冊の本 1973』を、夕陽丘図書館開館後の1976(昭和51)年12月には『としよかんでかりてよむこどもの本 1976』が刊行された。なおこれらリスト作成にあたっては、巡回文庫課と「読む会」との関係づけ、リスト作成に伴う研修のこと、定価表示の可否、リストの名称など、館当局と「読む会」との間で、さまざまな論議があったことを付記しておきたい。また、館報『ゆうひがおか』の“新刊紹介 みんなで楽しい読書を”などでの図書紹介に会員も参加した。これらのことが児童室開室後の閲覧課と読書振興課共編の『なつのほんだな』刊行へと継続されていったといえるだろう。

1977(昭和52)年7～8月には「読む会」メンバーが中心となって、大阪新聞に“夏休み図書案内”として、お薦め本を紹介した。また、1980～1984(昭和55～59)年にかけては毎月、『職員時報』（注8）に“シリーズ児童文学のすすめ”や“読書フリータイム”を連載、1981(昭和56)年3月末からはふたたび大阪新聞の“この本読んでごらん”のコーナーで子どもの成長をとらえた作品を紹介したりもした。

1.2 「こっぺぱん」の創刊～児童サービスの開始を願って

都道府県立図書館では児童への直接サービスは必要ないという考え方が多数をしめる中で、「読む会」の会員は、府立図書館においても児童への直接サービスを実施するべきだと考えており、新しく開館する夕陽丘図書館ではぜひ児童サービスをと願っていた。一方、府立図書館の外でも、60年代末から活発になっていた子ども文庫関係者を中心に夕陽丘図書館での児童サービスを望む声が強く出ていた。

しかし、1974(昭和49)年5月の夕陽丘図書館開館時には児童への直接サービスは見送りになっていた(注9)。

開館に先立つ1973(昭和48)年2月には「読む会」として、府立図書館の組合分会の機関紙『日刊ペチカ』に“新分館で直接児童奉仕を”を5回にわたり掲載した。また、図書館問題研究会大阪支部では1973年3月8日に問題別集会を開催したが(注10)、この集会に向けた討議資料を「読む会」が作成するなど、府立図書館での児童サービスの必要性を訴える活動を行っていた(注11)。

こうした中で「読む会」では、自らの機関紙を発行して府立図書館職員へ児童サービスの必要性を訴えることが必要と考え、手作りの機関紙『こっぺぱん』を創刊した。

以下に『こっぺぱん』の目次を紹介しながら、児童室開室に至るまでの動きを振り返ってみることにする。(〔 〕は補注)

0号 1974(昭和49)年5月13日 [B4 1枚/2種類あり]

[他に小型のちらし<ぼくたちに本をください!>も作成配付した。]

- ・子どもの本をよむ会からのメッセージ!
あなたもいっしょにべんきょうしませんか!!
- ・『こっぺぱん』・・・?
- ・[会員からの]ひとり一言

創刊号 1974(昭和49)年5月27日 [B5 6ページ]

- ・創刊のあいさつ
- ・大阪の図書館 むかし・・・そして今・・・ 遠山孝子(大阪市立中央図書館)
- ・BOOK GUIDE キスなんてだいきらい
- ・府民センターだより 南河内府民センター図書室 脇谷邦子
- ・「課題図書」の課題
- ・[会員からのひとり一言]

1.5号 1974(昭和49)年6月15日 [B5 1ページ]

- ・“こっぺぱん”問題についてみなさんに訴えます!

『こっぺぱん』創刊号を発売してすぐに大きな問題が発生した。館から、『こっぺぱん』は「府立図書館では児童への直接サービスを行わない」という館の方針にそわないことを外部に向けて発信するものであるとしてクレームがついたのである。館長・副館長・司書部長・司書部各課長と「読む会」との話し合いがもたれたが、以降の館内での会の活動禁止を言い渡されることになった。これに対して緊急発行されたのが『こっぺぱん』1.5号である。組合分会も組合員が自主的に作ったサークルであるとして、「読む会」を支持し、活動禁止の撤回を求めて館との交渉をおこなった(注12)。

しかし、図書館内が『こっぺぱん』問題で揺れていた時、図書館の外では大きな動きが起きていた。当時の黒田了一知事が、大阪府内の家庭文庫・地域文庫でつくる「家庭文庫・地域文庫を育てる会」の要望に応える形で、6月12日に夕陽丘図書館に主婦や児童のための部屋を設けると発言したのである。この発言以降、図書館は児童室づくりに向けて急展開した。「読む会」でも、あるべき児童室の姿を検討し、『こっぺぱん』2・3号で発表した。

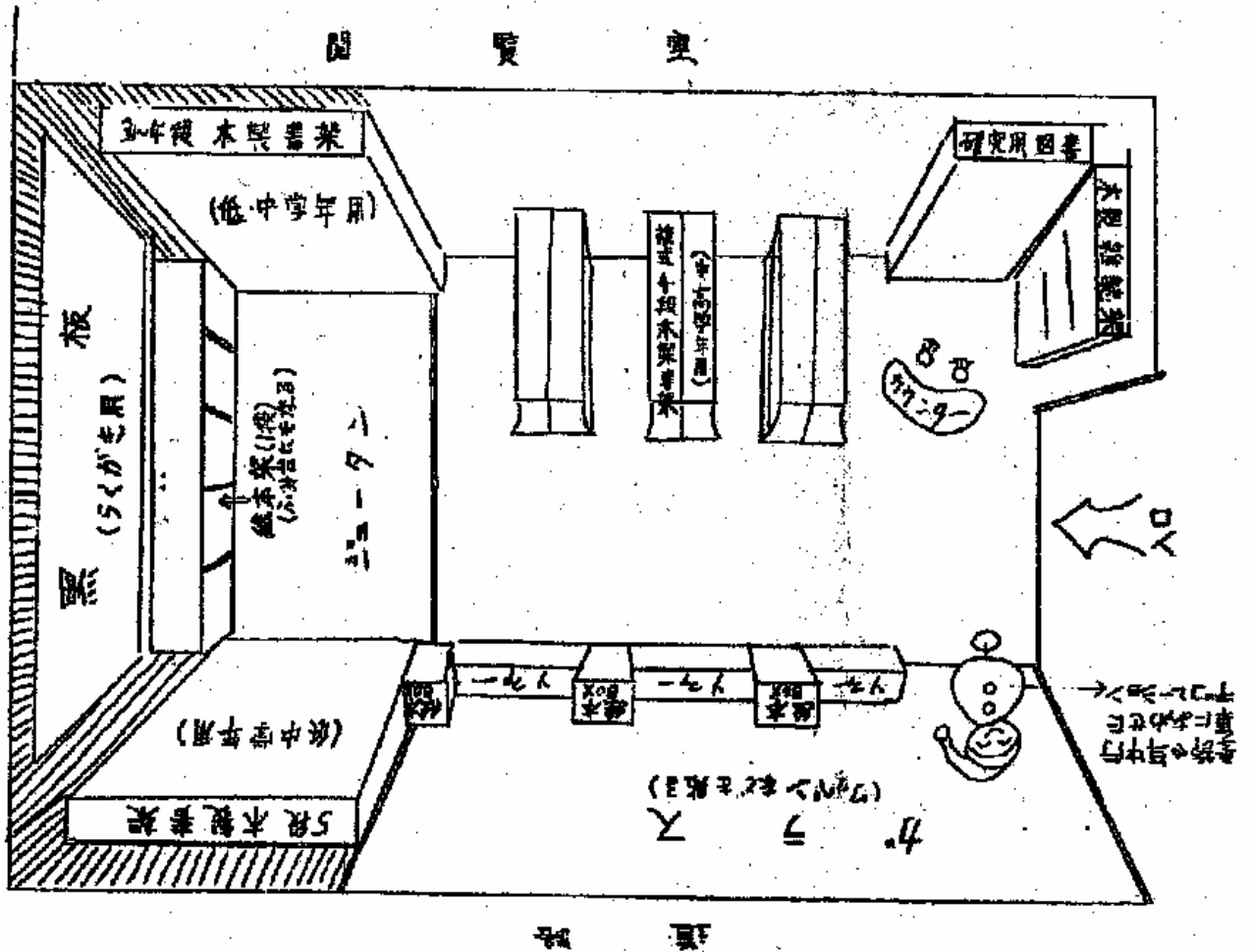
2号 1974(昭和49)年8月15日 [B5 4ページ]

- ・夕陽丘図書館の児童室問題に想う
- ・編集後記

・夕陽丘図書館の児童室問題に思う(2)

[付] こんな児童室はいかがですか? [B5とB4の図2枚]

こんな児童室は いかがですか?



4号 1974(昭和49)年9月末 [B5 6ページ]

- ・東京・図書館見てあるき その1 町田市立町田図書館
南河内府民センター図書室 川本香代子
- ・[BOOK GUIDE] 絵本ねずみくんのチョッキ
- ・[東京・図書館見てあるき その2] 浦和市立図書館を見学して
大阪キリスト教短期大学付属図書館 高橋寿恵子
- ・イギリスだより (1) エクセター会議への出席
[大谷女子短期大学助教授] 三宅興子

5号 1974(昭和49)年10月末 [B5 8ページ]

- ・イギリスだより (2) グリーン・ノウへの旅
[大谷女子短期大学助教授] 三宅興子
- ・[東京・図書館見てあるき その3] 昭島市民図書館を見学して
- ・夕陽丘図書館に児童室が!
- ・編集後記 [図書館問題研究会全国大会分科会で事例報告をしたことなど]

この間、9月22～24日に富山で開催された図書館問題研究会の全国大会第5分科会“子供のための図書館活動”で、「読む会」の活動について事例発表をおこなった(注13)。

10月4日には、1975(昭和50)年4月からの児童室設置に向けて予算要求が、さらに10月8日には部課長会議で児童奉仕についての方針が決定された(注14)。

特別号 1974(昭和49)年11月19日 [B5 7ページ]

- ・[11月7日の]「夕陽丘図書館の児童奉仕に関連して司書部長との話し合い」
から

11月7日に行われた司書部長との話し合いの内容は、(1)リスト作成について (2)西河氏の寄付金による児童書購入について (3)児童室の設置についてであった。

(1)は、中之島図書館で発行していた“あなたの読書のために一灯下の100冊”が、図書館は良書推薦事業をすべきではないという理由で、発行中止になったことを受け、子どもの本のリストも発行中止と決定された。(2)は、箕面市在住の西河久平氏より500万円の寄付の申し出があり、10月28日付けで児童書6,792冊を受け入れたもので(注15)、その後の児童サービス展開の基礎資料となった。「読む会」は購入リストの作成などの協力を行った。(3)児童室の設置については、この時点では館が予算要求をしている段階であった。司書部長から運営方針や奉仕内容の説明を受け、研修体制の確立の必要性や児童書資料コーナーと児童室との関連などを話し合った。

さらに11月～12月には副館長、司書部長、庶務課長と職員の意見交換会がもたれ、府立のかかえる様々な事柄(2階休憩室の騒音対策、書架増設の必要性や禁帯出資料の範囲

の緩和、延滞料廃止の検討等々)について話し合われたが、児童奉仕についても基本的な考え方が示された(注16)。

6号 1974(昭和49)年12月23日 [B5 6ページ]

- ・図書館とマンガ 第一回マンガを読む会より 無仁彰
- ・再出発にあたって 吉田[敏代]
- ・イギリスだより (3) チルドレンズ・ブック・センター
[大谷女子短期大学助教授]三宅興子
- ・記録 夕陽丘図書館の児童奉仕基本方針
[11~12月の]副館長等との意見交換会/[10月8日の]部課長会議報告より
- ・子どもの本をよむ会この一年をふりかえって

この年も、「児童書を読む会」(1969(昭和44)年10月に府内の図書館員を中心に発足)やストーリーテリングの勉強会「あまのじゃく」、英語原書で子どもの本を読む「オルコット会」、児童図書館研究会近畿支部(1973(昭和48)年1月発足)の学習会などに参加している。1973・74(昭和48・49)年の11・12月には、夜間に高石市にある保育士の養成校である南海保育専門学院の講師として児童文学を担当し、会員が交代で講義を行った。

7号 1975(昭和50)年3月18日 [B5 8ページ]

- ・東京からのおたより 府県立図書館における児童奉仕について
東京都立日比谷図書館児童奉仕係長 中多泰子
- ・[BOOK GUIDE]「十三才の夏」合評会より
- ・ハンディキャップを持つ人々への図書館サービス(1)
“ふきのとう文庫”と公共図書館 無仁彰
- ・編集雑記

第7号の「編集雑記」では、地域文庫「町の子文庫」のことが紹介されている。この文庫は1975(昭和50)年5月24日に大阪市の阿倍野区に誕生。篤志家から100万円の寄贈と建物の提供を受け、運営は図書館問題研究会大阪支部に一任された。府内各地の図書館員らが中心になって毎週土曜日に開いたが、ここにも会員が交代で参加していた(注17)。

家庭文庫・地域文庫との交流は、会発足当時から会員が願っていたことであり、巡回文庫課の職員らを中心に積極的に文庫行事などに参加していった。1970(昭和45)年10月に会員の自宅で開設された「くすのき文庫」(のちに地域文庫に移行)やこの「町の子文庫」では実際に運営にかかわった。なお1970(昭和45)年7月に松原市に誕生した「雨の日文庫」(中川徳子氏主宰)開設(注18)や、吹田市の「青山台文庫」(正置友子氏主宰)の運営にも会員がいろいろな形でかかわっている。

また、障害者(児)サービスにも目を向け、1973(昭和48)年の秋に府立砂川厚生福祉センターの見学や(センターの都合で絵本の読み聞かせなどの実践は結局できずに終わって

しまったが)職員との話し合いを試みたことがある。

- 8号 1975(昭和50)年7月14日 [B5 8ページ]
- ・(寄稿)夕陽丘図書館の児童奉仕について 一研究者より
 - ・まず動きだしましょう! 千葉県立中央図書館 荒井督子
 - ・ヨコハマだより(私信) 元当館職員 辻田敏代
 - ・街頭紙芝居の保存を!
 - ・『図書館白書'74』のさしえから 大谷女子短期大学助教授 三宅興子
 - ・[編集後記]

- 9号 1975(昭和50)年9月13日 [B5 4ページ]
- ・新たなる出発のために 夕陽丘図書館児童室の課題
 - ・編集後記
- [付]大阪府立夕陽丘図書館児童室(周辺図) [B4 1枚]

9月14~16日に神戸市須磨区で開催された図書館問題研究会全国大会に参加し、第15分科会“児童室の設計・運営”で、児童室の現状を事例報告(注19)。この第9号はその討議資料を兼ねている。

- 10号 1976(昭和51)年3月15日 [B5 4ページ/この号で休刊]
- ・まんが研究会開かれる 「はだしのゲン」を中心に
 - ・“ベスト3”の掲載について
生きることの意味/いちご/まぼろしの丘/りんごがたべたいねずみくん

各会員おすすめの“ベスト3”は次号にも掲載する旨の記述がある。休刊の理由は今となっては定かでない。会員のさまざまな事情が絡んでいたのだろうが、児童室の開設という大きな目的を達成し、また府立図書館において児童サービスが必要だという認識が広がったということで、『こっぺぱん』は役割を終えたのだと評価したい。

2 児童室開室から児童サービスの基盤を確立するまで

念願の児童室が、1975(昭和50)年7月18日に開室した。

児童室は、当初職員2名、広さ90㎡のささやかなものであったが、ここに確かな“場”と“人”を得たことで着実に実践活動を広げていくこととなった。

児童室の活動とそれに関わる「読む会」会員について、〈行事〉〈ブックリストの発行〉〈展示〉〈講演会・研修会〉〈じどうしつだより『はらっぱ』の発行〉と、項目を立てて動きをたどっていこう。

2.1 行事

児童室では、開室当初の1976(昭和51)年1月、「映画とブックトークの会」、同年8月「紙しばいとおはなし会」を開いた。しばらく途絶えていたが、5年後に定例行事として年間を通じて行われるようになった。

- ・定例かみしばい会 1981年7月 ~
 (毎月第二水曜日 1回目 2:30~ 2回目3:30~)
- ・定例おはなし会 1982年6月 ~
 (毎月第一木曜日 2:30~)

「おはなしの部屋」というスペースのない児童室では、絵本コーナーや書架と書架の間を利用するなど試行錯誤と工夫を重ねながら〈おはなしの時間〉が定着していった。その後、夏休みには〈なつのおたのしみ会〉、冬休みには〈クリスマス会〉等季節に合わせた行事も年間行事計画に組み入れられるようになった。

「読む会」の会員は児童室の行事に生かしたいと人形劇グループ「こっぺばん座」をつくり、会員外の人も巻き込んで練習に励んだ。この一座は府内各地の図書館行事などにも参加した。また、読み聞かせやストーリーテリングの勉強に再度取り組んだり、会員外の職員にも理解を広めようと職員向けの「おはなし会」を開いたりもした。

2.2 ブックリストの発行

子どもたちに本を紹介するものとして、ブックリストの果たす役割は大きい。読書意欲高まる時期に魅力的な本を紹介しようと、ブックリストの発行が年間発行計画の中に組み入れられるようになった。

- ・『なつのほんだな』 1981年7月 ~ ('93)
 (年間の推薦図書の紹介:年1回刊行)
- ・『わたしのほんだな - あき - 』 1981年10月 ~ ('92)
 次号より『あきのほんだな』に改題
 (テーマに沿った本の紹介:年1回刊行)
- ・母親に向けた『ほんはともだち - おかあさんごいっしょに』や、ミニ・ブックリスト(おりがみの本、クリスマスの本、おいしい本など)も次々に発行

読みつがれてきた本を知ること、本を選ぶ目を養うことは児童サービスの基本である。従来から「読む会」が続けてきた児童書の合評会は、この〈本を選ぶ目〉を育ててきたといえるだろう。また、会員は、系統立てて児童書を学んでいこうと、昼休みの時間を利用して、『日本児童文学案内』(鳥越信著 理論社)等をテキストに児童文学史の勉強を開始するなど活動はさらに多様になっていった。

児童サービスを担う部署は、児童室のほか、読書振興課、整理課(集書係児童書受入担当)があった。いずれにも「読む会」の会員がいて、互いに協力しつつサービスの展開を担っていった。特筆すべきは、1983(昭58)年に始まった選書会議である。当初は児童室担当者と集書係であったが、のちに読書振興課振興係児童書担当も加わり、定例化していった(注20)。府立図書館の児童書の収集は幅広く、受け入れる多様な児童書の中から直接こ

どもたちが手に取る開架室に置くにふさわしい資料かどうか等一冊一冊を手にとって意見を交えた。「選書」には児童サービスについての経験と研鑽が欠かせない。選書会議は“人”を育て、その人材の輪を広げる役目も果たしていたといえるだろう。

ブックリストにあげる図書の選定や紹介原稿の執筆にはさらに多くの会員の支援があった。

2.3 展示

直接子どもたちが利用する資料以外に、府立図書館所蔵の児童書の収集範囲は幅広く、特に外国絵本のコレクションには貴重な資料が多い。児童室開室1周年記念として1976(昭和51)年7月「世界の民話・昔話絵本」展が行われた。その後も幾度か展示は行われ、やがて、研究者のみでなく一般利用者にももっと楽しんでもらおうと1階展示コーナーで児童書の展示が活発に行われるようになった。

- ・こどもに空想とやさしさをおくる絵本作家 - アメリカの絵本作家三人展(1981.10)
- ・ラテン5ヶ国の絵本(1982.5)
- ・マザーグースの世界(1983.6)
- ・アルファベットの絵本(1983.8)
- ・こんな家に住みたいナ 絵本にみる住宅と都市(1984.7)等々。

以後も毎年継続して、さまざまなテーマで活発に展示が行われている。

2.4 講演会・研修会

1977(昭和52)年1月、児童室主担で、間崎ルリ子氏を講師に迎え「お母さんのための読書研修会」が行われた。

府内図書館や文庫等子どもと本に関わる人たちへの研修は、府立図書館の児童サービスの大きな柱のひとつである。ただし、文庫活動への支援・振興業務は、読書振興課(自動車文庫係・振興係)が担っていた。かつて、府内に図書館が少なく自動車文庫の果たす役割が大きかった時代に比べ、次第に市町村図書館が建設され、児童サービスにおいてもサポートが求められていた。府内図書館職員等も含めもっと幅広く子どもと本に関わる人たちへの研修を行っていくには、児童室と読書振興課が連携していくことが必要になっていた。ここでも、「読む会」会員がそれぞれの部署にいて、スムーズな連携協力を可能にした。

「北欧圏の絵本の現状」(木村由利子氏) 1982(昭和57)年10月

「現代に生きる子どもとおはなし」(大月ルリ子氏) 1984(昭和59)年3月

「幼年文学をめぐる」(上田由美子氏) 1986(昭和61)年2月

以後、児童文学・児童サービスに関する講演会を読書振興課と協力しつつ、隔年で担当していくこととなった。

2.5 じどうしつだより『はらっぱ』の発行

1985(昭和 60)年に府内図書館向けの情報提供誌“大阪府立夕陽丘図書館じどうしつだより『はらっぱ』”が創刊された。府内図書館の児童サービスを支援する情報を発信するこの冊子は、児童室の長年の課題であり念願でもあった。「読んでみてどこか心に残り、傍らにおいて少しは役立ち、そして子どもと本に関わる者の思いを交流できるものをめざしたい」これが創刊号に記された『はらっぱ』の目標である。初期の号は児童室以外の会員の関わりの度合いが大きかった。児童書の評価、資料紹介、子どもの本の世界大会報告、行事、読書離れ、児童奉仕のあり方等を取り上げて、問題提起と情報提供に努めた。

2.6 “人の輪”が力になって

1979(昭和 54)年 10 月に鳥越信氏の児童文学関係コレクションが大阪府に寄贈されることが決定した(注 21)。1984 年に大阪府立国際児童文学館が誕生した。この児童文学館と府立図書館の役割分担が新府立図書館建設構想の中で論議の対象となった。行政改革の見地からも、大阪府としての児童に対する図書館サービスのあり方が検討課題となり、組合分会でも論議がなされた(注 22)。開室から 10 年を経て、実践を積み上げ、サービス基盤を確立してきたことが、新府立図書館での児童サービス継続決定の力になったといえるだろう。

また、「読む会」会員を中心とした図書館内部からの支援、加えて、府立図書館の児童サービスの継続を願う府内図書館・文庫関係者の方たちからの声が必要な支えとなったのも確かである。こどもと本を結びつける直接サービス、そして、府立図書館として市町村図書館の児童奉仕活動を支援する間接サービス、どちらの面においても、府立図書館の児童サービスが「読む会」の有形無形の援助に支えられてきたことは言うまでもない。

サービスは“人”が育てていくものであり、また、“人”はサービスを真摯に続けていく中で育てられる。「読む会」という人の輪は、その大きな源泉となっていたといえるだろう。

3 読書振興課で果たした役割

3.1 「読む会」での学習を力に

府立図書館にあって、児童室開始以前は府民と直接接する自動車文庫が実質的な児童サービスを担っていた。1974 年の夕陽丘図書館開館を機に、巡回文庫課から、読書振興課へと課名を改め、自動車文庫係に加えて振興係を設けて、府内全体の読書振興、図書館未設置市町村に対する補完サービス並びに図書館設置を促すための役割も果たしていった。時に子ども文庫の隆盛期で、図書館設置を求める住民運動が各地で盛んになってきた時期でもあった。文庫のお母さん方の学習意欲も高く、各地で読書会や勉強会が開かれ、振興係の職員は講師として、進行役として、館外に出向いていくこととなった。そういう時にも「読む会」で力をつけていたことが大いに役立った。

読書振興課では自動車文庫用と読書会用に資料を収集・提供していたが、自動車文庫に載せる児童書の選定及び読書会用児童書の選定には会員である職員があたった。府内の読書会で取り上げる作家・画家の作品を出来るだけ集め、作家・画家の研究書と共に提供した。

特に松原市や熊取町や阪南市（当時は町）の文庫では児童書の合評や研究が活発に行われており、レベルの高いレファレンスも多く寄せられた。日本語の参考文献が少ない作家・画家についての質問もあり、その場合も、児童室とタイアップして、英語のレファレンス・ブックで調査し、作家・画家のプロフィールや、書誌をコピーし図書とともに提供した。

絵本作家では、例えば、センダック、ワイルド・スミス、レオ・レオーニ、エッツ、エリック・カール、バーニンガム等々。この時も、「読む会」の日ごろの研究活動による知識・経験の蓄積が大いに役立ったといえる。

3.2 市町村図書館への協力

府内に新しい図書館が設置される時は、読書振興課が府の社会教育課と共に支援したが、資料面では、基本図書リスト、参考図書リストや、児童書のリスト作成にあたった。児童書のリスト作成に関しては、「読む会」の会員が全面的に協力した。1989(平成元年)阪南市立図書館(当時は町立)など多数の開館に立ち会った。

読書振興課では、一日緑陰図書館と銘打って自動車文庫車数台で出向き、主に子ども向けの企画を催した。1979(昭和54)年、1983(昭和58)年、いずれも豊能町にて実施。

また、自動車文庫の出動休みの8月には、府内各図書館主催の「としょかんサマーキャラバン」に自動車文庫車で赴き、協力参加した。1981(昭和56)年 於：和泉市立図書館 1982(昭和57)年 於：茨木市立図書館 1982(昭和57)年 於：和泉市立図書館 等。これらの行事にも会員の経験が生かされた。

児童奉仕活動の一環として、1979(昭和54)年に、会員を中心に結成した人形劇団「こっぺぱん座」は、館内の児童室のみならず、府内の図書館、公民館、保育所などで「三匹のやぎのがらがらどん」「食べられた山姥」「白雪姫と七人の小人たち」「赤ずきん」「なかよし」等の人形劇や、紙芝居、ペープサート、絵本の読み聞かせなどを公演し、読書の楽しみにつながる活動をめざした。

4 終焉、そして新たな始まりへの期待

4.1 36年間を振りかえって

「子どもたちと本をつなぎたい、図書館サービスを子どもたちにも届けたい」との思いで始まった「読む会」であった。時代が変わり、社会が変わり、大阪府立図書館における児童サービスがスタートし、「読む会」会員の協力により、着実に地歩を固めていった。しかし、サービスが定着してもまだ、図書館職員全体からみれば、「府立図書館に児童サービスは必要ない」と考える職員も多く、係員2名のちっぽけな児童室存在の比重は軽かった。そんな中で、月に1回、「読む会」で本について語り合い、情報交換することは会員にとっては、楽しみであり、心の支えともなっていた。時には子育ての悩みをこぼしたり・・・、よいストレス解消の場にもなっていた。

会員はリスト作成の協力、休暇をとって行事に参加したりと、有形無形の協力をしてきたが、次第に時間外の協力が困難になってきた。児童室は図書館の一つの業務として課・係の中で自立することが求められていた。

そんな中で、新図書館建設が決まり、様々な人々の努力と協力があって、児童室存続が決定した。新府立中央図書館でのサービス開始準備に向けての取り組みが始まった。長期間にわたって、子どもの本を読み、自費で研修に参加し、勉強を続け、図書館員としての技量を磨きつづけ、お互いの学びや、経験を「読む会」を通して共有してきた実績は大なるものがあった。会員の思いと蓄積してきたノウハウが新府立中央図書館での児童サービスに結実したのだと言えよう。中央図書館でのサービスの展開については『中之島百年』に記されているので、ここではふれない。

4.2 「読む会」の果たした役割は受け継がれていく

しかし、新中央図書館開館後、「読む会」は残念ながら休会状態となってしまった。職場環境の変化や、開館直後の利用増大による業務に追われ、少なからぬ会員が会を続けるゆとりを無くしてしまった。児童サービスが図書館業務としてしっかりと確立・自立できたことも理由の一つである。

休会状態になってしまった「読む会」は2004(平成16)年3月、発足当初の会員の退職を機に区切りをつけ、解散することとした。過去に「読む会」で徴収していた会費(合評会のための図書の購入目的等で月100円徴収、時に児童サービスのために使ってきた)の残額(約9万円あった)は絵本を購入して、「読む会」として中央図書館に寄贈して清算した。

1968(昭和43)年の会の結成以来、「府立図書館で、子どもたちと本をつなぎたい、図書館サービスを子どもたちにも届けたい」と、思いつづけた願いはかなった。

その間、「読む会」を通して、多くの本を読んできた。「読む会」を通して、多くのことを学んできた。多くの会員の学習と体験を交流しあい、お互いを高めあうことができた。本だけでなく、人形劇など、子どもの文化全般に対する視野を広げることができた。図書館の仕事全体に対しても、真摯な意欲を持ちつづけることができた。

1993年、夕陽丘図書館の若い職員を中心に勉強会「夕陽丘倶楽部」が発足した。「子どもの本を読む会」が一つのモデルになったと思いたい。大会・研修会等の参加報告、障害者サービス、レファレンス、YAサービス、図書館の自由等のテーマに加えて、組織の話、予算についてもテーマとして取り上げている。仕事に対する研鑽を積み、仕事に熱意と意欲を喚起していった。ただ、この「夕陽丘倶楽部」も新図書館が開館してまもなく中断してしまった。

しかし、今また新たな勉強会が中央図書館の若い人たちを中心に幾つか試みられている。「読む会」以来の図書館員(専門職)としての誇りと、よりよい仕事を追及したいという熱意は、大阪府立図書館にしっかりと根付いている。

注・引用

- (1) 『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』、大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会、2004年、pp.238-240
- (2) 西澤千慧「大阪府立図書館の子どもの本を読む会と児童書を読む会のこと」、『大阪府立図書館紀要』8号、大阪府立図書館、1972年、pp.14-18
- (3) 金子幸子「「児童・・・」との関わり その一端」、『こどもの図書館』30(3)、児童図書館研究会、1983年、pp.21-22
- (4) 大阪府立図書館巡回文庫課『わだち』No.123、大阪府立図書館、1968年。：これが会としては最初に活字化され広報された図書紹介。見開き2ページを使い6点掲載。
- (5) 金子幸子『わだち』No.143、1970年
- (6) 『わだち』No.152、1971年：巡回文庫課勤務だった神谷房子が書いた記事で、後段で「読む会」のことや『児童読み物案内』の発行にまつわる話しに触れている。
- (7) 西澤千慧『わだち』 No.154、1971年
- (8) 大阪府職員課『大阪府職員時報』 大阪府職員互助会、
- (9) 1974(昭和49)年7月に児童書資料コーナーが読書振興課の片隅に設置された。研究者や文庫関係者対象の研究書や洋絵本を中心とした資料群で、児童室開室後は第一閲覧室に移設された。
- (10) 『図書館問題研究会大阪支部報』No.55、図書館問題研究会大阪支部、1973年、pp.37-40
- (11) 子どもの本を読む会(文責・金子幸子)「大阪府立新分館で直接児童奉仕を！！」『図書館問題研究会大阪支部報』No.54-1、図書館問題研究会大阪支部、1973年、pp.32~35
- (12) 「こっぺぱん」よその子には食べさせるな！！『分会ニュース』No.10 大阪府職員労働組合夕陽丘図書館分会、1974.6.11
「こっぺぱん」問題で副館長と交渉 『分会ニュース』No.13 1974.6.24
- (13) 『第21回図書館問題研究会全国大会記録』 図書館問題研究会、1974年、p.51
- (14) 『こっぺぱん』6号に記録を掲載
- (15) 『ゆうひがおか』No.3、大阪府立夕陽丘図書館 1975年
- (16) 『こっぺぱん』6号に記録を掲載
- (17) [前田章夫]「図問研文庫(仮称)設立のための準備会報告」『図書館問題研究会大阪支部報』No.78、図書館問題研究会大阪支部、1975年、pp.17-18
「町の子文庫誕生記」『図書館問題研究会大阪支部報』 No.83 図書館問題研究会大阪支部、1975年、pp.19-23
前田章夫「“町の子文庫”誕生記」『図書館問題研究会会報』No.165、図書館問題研究会、1975年8月、pp.51-52ほか
- (18) 池内進「家庭文庫をつくりたい」『わだち』 No.144、大阪府立図書館巡回文庫課 1970年
- (19) 『第22回図書館問題研究会全国大会記録』 図書館問題研究会、1975年、pp.92-95
『図書館問題研究会会報』 No.166、1975年、p80
- (20) 末永敏子「スケッチ 選書会議 子どもの本」 『ゆうひがおか』No.38、1987
- (21) 古野勝利「財団法人大阪国際児童文学館の役割と将来」『ゆうひがおか』No.21、大阪府立夕

陽丘図書館 1981年

- (22) 児童サービスについては、『分会ニュース』No.439(1984.9.12)に当時の児童室担当の大西登貴子と前田千慧が“あなたとともに考えていきたい児童室のしごと・今後”と題して現状と課題を掲載。他に『図書館問題研究会大阪支部報』No.186(1983)に“府立図書館の児童資料サービスのあり方を考えるために”(前田千慧)を掲載したのち加筆訂正し『こどもの図書館』Vol.31, No.5(1984)にも掲載。